

## 雨雲きたる

猪又 徹

### A rain cloud coming up

Tohru INOMATA

昼過ぎ、まもなく雨の季節を迎えるからだろうか、少し曇っていた空に黒く水分を含んだような重たい感じの雲が現れ、南東の風に乗ってゆっくり、ゆっくりと動いていくのが見られる。それは画面の右下から左上方への雲の流れである。この雲の動きとその色が新鮮に見え、描く手を止めてしばらく黒い雲を眼で追った。

当初の制作意図は、数週前に植えられた苗がスクスク育ち若々しい黄ミドリ色が辺りを支配していて、その色彩の存在感に対する憧れを表現することであった。稲田は黄ミドリと言うより光の当たり具合ではまだ黄色に近く、人間で言えば中学生位の年齢で、日々成長する伸びやかさや、発展性を感じさせる洗刺した色である。

そこへ現れた黒い雲は、若々しい色や雰囲気と少し異なるだけではなく、今にもその場面の美を破壊するかと思えた。しかし黄ミドリ色の上に出てきた黒い雲は、色も形も全く何の無理もなく、刺激的でもなく、違和感を生じさせることもなく、むしろその自然の調和の妙を証明するかの如く自然の中の一瞬の動きとはいえ行き来する黒い雲の形や量と、その下に広がる黄ミドリ色との調和の美しさを演出しているのに気をうばわれた。

黒い雲はその動きが時に急に早くなり、小さなちぎれ雲となって飛ぶように動き、そのちぎれ雲が互いに呼びあうように集まっては大きな黒い色のかたまりになった、と思ったらまた急にちぎれはじめる。

最も美しいのは、黒い雲が飛んで行きその黒雲の動きの早さがスーッと墨を引いたようになり、明るいコバルトブルーの色の中にただ滲んでしまう瞬間が美しく、また魅力的である。画面左端に見える黒い滲んだ雲がその瞬間である。画面中央のやや右は黒い雲が少しずつ集まり始める所である。

しばらく見とれていたが、ハッと我に返り、この黒雲と微妙にその影響を受けて少し暗くなっている稲田と藁屋根周辺の木々の色を表現すべく手を急いで動かした。

若々しい稲田の黄ミドリ、少し重さを感じさせる暗紫色の雲とその動き、辺りの木々の色、これらが刻々と微妙な変化するのだが、全体に見事な色の中和があり、特別その存在を誇示するような色も動きも見ることにはできない。全体がゆるやかに、大河の流れの如く移ってゆく様は何に例えればよいのだろうか。この大自然の一瞬における色と動の調和をなんとか表現してみたいと思った。

画面の構成はこの意図をどのように表現するかだが、空、藁屋と木々、稲田それぞれをどのような空間配置にするのが良いのだろうか、つまりどこによりスペースを持つかによってその意図が表現されるだろう。

空と稲田は季節を表現する空間であり、藁屋と木々はその状況を強調するものと思われる。

やはり、空の雲の動きと、稲田がその影響で色彩的微妙な変化を持っている状況を表現することで、この意図が表現できるのではなかろうか。そうするとやはり空のスペースを主にした画面構成をすることである。

自然描写の絵画表現は芸術の中で哲学的に新しい思想ではない。

芸術が自然から何かを発見し表現するのは科学的領域とはことなり、個人と自然との係わりの深さ、内容、質を問う課程が表現されているのである。こうして追求されたものが、他者と共有するものが有るのか否かが問われていて記号的な共有を求めているということではない。

人間が自分達の世界を表現しようとした時見えていたのは自然の世界であった。そのときから今に至るまでこの関係は変わらず、自然への興味や畏敬が様々な様式で表現されまた科学の対象ともなってきた。

突然の黒雲の出現であれ、その形であれ、どのような現象であれ、またその変化であれ、自然の中には、調和をくずす形や色を示すものは一瞬たりとて無いのである。これはとても不思議なことである。

ここには、人間が求めている価値とは大きく隔たるものを観ることができる。

人間の世界には自己とその存在を示す「自己主張」が必要なものと言われている。

人間にとって自己の主張やその存在を示すことは確かに意味がある。この思想は近代ヨーロッパの知性が見出したものではないだろうか、しかし「自然を超えて…」「自然を克服して…」「自然と共有して…」「自然を大事に…」等の考えの底辺には人間と自然の対立構造を前提にし、しかも人間優位という視点から出発したものではないだろうか。

「自己主張」という考えもここを出発にした思想ではないだろうか。私たちは本当に自然と対立して生きているのだろうか。芸術の創造とはこの自然を越えたもの、あるいはまったく意識しない所から出るものを指しているのだろうか。私達はヨーロッパの思想を十分に理解し、学習しているだろうか。

たとえば、ブラジルの先住民には自己存在を他者へアピールするという自己主張はなく、むしろ「何もなかった」、つまり自然というジャングルの世界に生を受けてそこで生きる時間を生きそして死んでいく、ただそのことで十分だと言う考えがある。ジャングルの一本の木や、動物や鳥は自分たちの生命を支えてくれているのだから彼等の存在は大切で自分たちと同等の存在価値があると言う。(注1)

メキシコの先住民マヤーラカンドンからもこのような考えと生活を見たことがある。(注2)

こうした思想に近いものは東洋や日本の一部でも見ることができる。「自己主張」の意味については世界にはいくつかの考えがあると思う。

近年は科学の進歩発達で様々な自然現象は解明されて人間はそれへの恐怖や畏敬や不思議さ等を忘れてきている。確かに理解できるものへはそれほどの恐れ等はなくなったであろう。しかし、自然を見ていて、科学的現象として理解できるものの人間の知識や知恵で計れないものの存在を感じる時、やはり何か畏敬の念といったものがどうしても生じてくるのは何故だろうか。

人間が持つ自然への興味や畏敬こそ、人間としての始源的な感性を示す方向で、原始的といわれる世界の宗教儀礼等にそれらを見ることができる。

私が、自然から受ける感動、興味、畏敬の念は人間としてごく普通でしかも原始的とも言えるものであり、それを絵画として表現しているのである。その感動、興味、畏敬の念等は自然を写すということだけでそれらを表現出来るものではない。自然が持つそのエネルギーや生命力はどうしたら表現できるのだろうか。これは技術的課題なのだろうか、それとも個人の持つ心的、あるいは精神的、又は思想的なものだろうか、私は自然を描写することでむしろ

人間の世界について学んでいるように思う。自然を十分に表現出来るとも思えない、むしろ少しでも自然に近づこうとしている。こうした私の姿勢と熱意が、他者と共有できれば嬉しいと思っている。

この日、この黒い雲は少しずつその量をふやし、それからしばらくして大粒の雨となった。

稲田は久しぶりの雨にその伸びやかさと色をいっそう鮮明にして輝きをました。

## 参考資料

注1 長倉洋海：『鳥のように、川のように』  
(徳間書店 1998年10月31日)

注2 猪又 徹：南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究  
1985年度メキシコ  
海外学術調査報告第3章ラカンドン族  
ラカンハに於ける動物名称 Yonen について

## 作品項目

使用紙	ワットマン290グラム荒目
サイズ	37×54cm
使用絵具	透明水彩絵具
制作年月	2005年6月
場所	山口市中尾





雨雲きたる  
猪又 徹